

お隣さんの綾人くん

「んっ♡んうっ♡」

声を漏らさないように唇を食いしばっても、ぱちゅ♡ぱちゅ♡ぱちゅ♡とナカを突かれるたびに甘い声が漏れ出てしまう。どちゅ♡と角度を変えて強く突かれた瞬間、ビビビッ♡とキツく痺れるような快感が走った。

「ああんっ♡」

「しー。そんなに声出したら、みんなに聞こえちゃうよ？」

言葉とは裏腹に、彼は見つけた弱いところを繰り返しどちゅ♡どちゅ♡と責め立てる。

「だってこんな、あんっ♡やつ♡あうう♡♡」

気持ちいいのがいっぱいで、頭が回らない。でも、我慢しないと。こんな

はしたない声、みんなに聞かれちゃったら。

「うんっ♡♡♡んっ♡♡♡」

「っはぁ♡、ひなのさん、かわいい……♡」

我慢すればするほど、脳みそがピリピリ痺れて、何も考えられなくなっ
ていく……♡♡♡



都内駅近徒歩十五分。築三十五年だけれど、内装は綺麗で住んでる人も
いい人ばかり。家賃も手頃。それが私の住む「もみじ荘」だ。

新卒の時に住み始め、二階の角部屋という一番いいところにずっと住まわ
せてもらっている。

朝の支度をしてごはんを食べる。今日は朝から気合いを入れて焼き鮭にしてみた。豆腐とわかめのシンプルな味噌汁と、昨日のうちにタイマーをかけて炊いておいた白いご飯。簡単だけど、美味しいご飯は心を整えてくれる。料理が趣味の私はもちろん食べるのも好きで、朝からペロリとしっかりめの和定食を平らげてしまった。

洗い物をしていると、小さめの音量で流しているテレビに重なってドタバタと音が聞こえる。壁の向こう、隣の部屋からだ。また寝坊したのかな、クスツと笑ってしまった。洗い終わった食器を乾燥棚に置いて、最後にリップを塗り直してテレビを消した。

「おはようございます、ひなのさん！」

家を出てアパートのゴミ捨て場に燃えるゴミを出していると、後ろから声をかけられた。

「おはよ、綾人くん」
あやと

声をかけてきたのは、お隣さんの綾人くんだ。

もみじ荘は割と住人同士仲がいいけれど、名前で呼ぶのは綾人くんだけ。今時の大学生にしては律儀に引越しそばを持ってうちを訪ねてくれた。

ゴミ捨てで顔を合わせるたびに話すようになって、「よければお姉さんのこと、名前で呼んでいいですか？ 俺のことも綾人って呼んでください！」なんてニコニコ人懐っこい笑顔で言われたら、うんと言う他になかった。大歓迎だ。

今日の綾人くんも、朝からドタバタと音を立てて準備をしていたのに、ふわふわの黒髪は柔らかくセットされていて、大きな口をニコニコと緩ませている。

「綾人くんは朝から元気だねえ。今朝も飛び起きる音聞こえたよ。大学遅

れそうなんですよ？ 急がなくて大丈夫？」

くすくす笑ってそう聞くと、「あー……」と綾人くんは曖昧な声を出してから、頭を掻いた。

「や、大学は全然余裕なんですけど……早起きしないとひなのさんに挨拶、できないから……」

ほんのり頬を赤らめて目線を逸らす綾人くんは、胸がキュンとする。こんな可愛い大学生男子にそんなこと言われたら、調子に乗りそうになってしまう。

「朝から可愛いなー！ もー！」

半分照れ隠しに、背伸びして綾人くんの髪の毛をわしゃわしゃとかき混ぜる。「うわっ」と綾人くんが声を漏らしたのを聞いて、ハツとする。せっかくセットしてた髪の毛をぐちゃぐちゃにしてしまった。

「あああ！　ごめん、つい」

あわあわと私が手櫛で髪の毛を直し始めると、綾人くんは少し屈んでくれた。

「いーですよ。ひなのさんなら」

黒い前髪の間からこちらを見上げる視線に、どきりとしてしまう。

「……おねーさんをからかわないの。ほら、できたよ。大丈夫かな」

素知らぬ顔で髪の毛を整え直して手を離せば、綾人くんは姿勢を正して確認するように頭を触った。

「ひなのさんが見てかつこいいなら大丈夫」

「はいはい、可愛いから大丈夫だよ」

「……ひなのさんこそ俺のことからかつてるじゃないですかあ」

不満げに口を尖らせる綾人くんにくすくすと笑っていると、下の階のお

ばあさんが微笑ましげに挨拶してきた。

「おはよう。二人とも朝から仲良しね」

「おはようございます、山田さん」

綾人くんはネットを外して、山田さんと一緒にゴミを捨てた。

「あなたたち仲良いのはいいけど、時間は大丈夫？」

「そうですね、そろそろ行きます」

「あ、俺も！ 駅まで一緒に行きます！」

いってきまーすと二人で声を揃えて、私たちは駅に向かった。

綾人くんは都内にあるそこそこの大学の三年生。この春に実家から離れて一人暮らしを始めたばかり。理工学部にいるいわゆる理系男子で、レポートがたくさんあって大変だといつも言っている。

真っ黒な髪をいつもふわふわにセットしていて、まんまるな目が印象的。

ニカッと笑う顔はちよっぴり子どもっぽいけど、大学生特有の不思議な自由さが笑顔にとっても似合っていて、ふとした瞬間にドキリとしたりする。

そんな可愛い男の子が、なんだか懐いてくれている。毎朝バタバタと音を立てながら急いで用意して、ゴミ出して顔を合わせて、こうして駅までの道を歩くのを楽しみにしてくれているんだから、悪い気はしない。

リュックを背負い直した綾人くんは私の隣、車道側に自然と回って、私より長い足を私の歩幅に合わせてくれる。このさりげなさ。きっと大学でもモテるんだろぅなあと思ってしまう。そんな私の妄想は知る由もなく綾人くんはにこやかに話します。

「山田さん、今日も元気そうでしたですね」

「ね。先週は軽く風邪引いてるって一〇一の広岡さんに聞いてたから心配だったけど……」

「えっ、そうだったんですか!？」

「うん。お買い物とか、広岡さんが代わりにしてくれてたみたい」

「そっかあ。山田さんも広岡さんも、言ってくれたら俺がおつかいくらいしたのに」

綾人くんはちよっぴり拗ねたような声を出す。

もみじ荘は二階建てで四軒ずつ、八世帯が住んでいる。五世帯は私みたいな独身社会人や綾人くんみたいな大学生で、少しずつ住人が入れ替わっている。一番の古株は老後に一人暮らししている山田さんで、その次が広岡さん。そして、二人暮らしの親子が一組。私ももう古株組に片足を突っ込んでいる。

大家さんが割と人柄重視で入居者を選んでいるらしく、内見の時に必ず立ち会って貸すかどうかを決めているらしい。おかげで住人はみんないい

人で、大学生は大体四年間引っ越さずにここで過ごすことが多いらしい。私も住み心地が良くて引っ越す気がないからよくわかる。

「ひなのさんも、何か困ったことがあったらちゃんと行ってくださいね。折角隣に男手あるんだから、使ってください。風邪引いたらよろこんでパシられますし」

「それは気が引けるなあ」

「おつかいでも、電球交換でも、模様替えで家具動かすのとか……あ、ゴキブリは嫌かな……」

「えー、それ一番頼りたいけどな、ふふ。綾人くん虫ダメなんだ？」

くすくす笑うと綾人くんは唇をつんと尖らせた。

「虫っていうか、ゴキブリ平気な方が珍しくないですか？ でもひなのさんがキヤーって言ったら俺いつでも殺虫剤持って突撃するんで。泡の固ま

るやつ買ったんで無敵です」

「あはは、心強いね。あの泡のやつ気になってたんだ。そのままゴミに捨てられるんでしょ？」

「らしいです。ありがたいことに今のとこまだ出番ないですけど……って
いうかすみません、朝からゴキブリの話なんて気分悪いですよね」

アワアワとする綾人くんが可愛くて「ゼーんぜん」と笑顔で返した。

どんな小さなことでも、綾人くんと話すとなぜか楽しい。最近は毎朝顔を合わせて一緒に駅まで歩くのに、話題が途切れることもない。

「そうだ、ひなのさんがこの前気になるって言ってた駅前の新しいカフェ、
行ってきたんですよ。家じゃないところで課題しようと思って、気分転換
に。ひなのさんカプチャーノ好きですよね」

「うん、好き。あそこカプチャーノあるの？」

「結構ドリンクの種類多かったですよ。カップチーノもカフェラテもありました。俺カフェラテ頼んでみたんですよ」

綾人くんはスマホを取り出して操作すると、写真を見つけたらしく「ほらこれ」と見せてくれた。

ナチュラルな木製のテーブル。その上に置かれたコーヒーには小さなハート模様がラテアートで描かれている。SNS映えしそうな、おしゃれな写真だ。

でも写真以上に綾人くんに詰められた距離の近さが気になって、勝手にドキドキしてしまう。

「わあ、可愛いね。いいな。今度行ってみる」

危ない。大人の自分を取り戻して、平静を装ってそっと元の距離へと戻る。特に違和感は生まれなかったようで、綾人くんはニコニコしながらス

マホをしまった。

「ぜひ。よかったら俺も誘ってください」

「でも課題の邪魔じゃない？ 綾人くん、家でもよく音楽かけてるから勉強してるのかなって」

「わ、全部聞こえてました!? すみません、うるさかったですよね」

「ううん、全然。綾人くん曲のセンスいいなーって思ってた。私の好きなバンドの曲ばかりだから」

実際、綾人くんとは音楽の趣味がびっくりするくらい合うみたいだった。うちのアパートの残念なところは壁が薄いことなのだけど、休日に綾人くんの部屋から聞こえてくる音楽は控えめな音量で、テレビをつけたらかき消されてしまう程度だから迷惑と言うほどのものではない。しかも曲は私の好きなバンドの曲ばかり。勝手に私も一緒に聴きながら過ごしてい

るから、全く苦じゃない。

「むしろ綾人くんもこのバンド聴くんだって思ってた嬉しいよ。勝手に聴かせてもらってる」

「本当ですか？　なんか嬉しいな。サブスクにない曲とかも聴きたいんですけど、配信されてないCDは探そうと思っても高かったりするじゃないですか。レンタルショップも今はほとんどないし、その辺が残念なんですよね」

「ああ、あのバンドの曲だったら大体CD持ってるよ。結構好きなんだ」「ほんとですか！　今度貸してください！」

「いいよ。また暇な時にでも声かけて」

綾人くんは話題が豊富だし、びっくりするくらい私と好きなものが被っている。勧めたものは大抵好きだと言ってくれるし、綾人くんは勧められ

たものも大体間違いない。

話し上手で聞き上手な綾人くと歩く十五分なんてあっという間で、朝から綾人くんに元気をもらって私は満員電車で臨んだ。

労働を終えて家に帰ってきた頃にはとっぷり日が暮れていた。上司も後輩もいい人だけど、それでも労働というものはなんでこんなにもしんどいのか。カンカンと音を立てて階段を上り、自分の家に入って、パンプスも上着もタイツも脱いで部屋着になって、ようやく一息つけた。

ソファに座り込む前に、手を洗って台所に向かう。料理が趣味の私は、毎晩の夕飯作りがちよとしたストレス発散になっている。会社はもうすぐ納期の案件でバタバタしていてお昼ご飯もゆっくり食べられないから、最近はお弁当じゃなくてコンビニのおにぎりを詰め込むだけ。せめて家にい

る時くらい美味しいものを食べたい。

トントンとまな板を包丁が叩く音。丁寧に面取りをして、根菜は水から煮始める。だし醤油とみりんとお砂糖で味を調えながらお肉や糸こんにゃくと一緒に野菜を煮詰めていけば、くつくつと鳴る鍋の音と湯気の暖かさがゆるりと心をほどく。

今日の夕飯は肉じゃがだ。ちょっと手のかかる煮物をメインに据えた代わりに、味噌汁は豆腐とおあげと顆粒だしで簡単に。週末に作り置きした小松菜の胡麻和えを添えて、今日の食卓の完成だ。

自分で作ったご飯は、我ながらとっても美味しい。子どもの頃から食べるのが好きで、夕飯が待ちきれなくてお母さんのご飯の支度を手伝っていたら、いつの間にか料理が趣味になった。

……元カレも、美味しいって言ってくれたし。

夏を前に別れた彼氏のことを思い出したら、モヤモヤと気持ちか重くなつてしまった。だめだ、よくない。

気を取り直そうとじゃがいもにお箸を伸ばすと、隣から「あっち！」という叫び声と、ガシャーンツという物音が響いた。私は思わず家を出て、隣家のドアを叩いた。

「綾人くん！ 大丈夫!？」

綾人くんの部屋からはガタゴトと物音がしていたけれど、しばらくしてから玄関ドアが開いた。

「すみません、うるさくして」

困り顔で笑う綾人くん。動けなくなったわけではないことに少し安心した。

「ううん、綾人くんこそ大丈夫？ 結構大きな音したけど……」

「あー、そんな大したことじゃなくて」

返事に少し詰まった綾人くんは、頬を掻きながらへによりと眉を下げた。
「最近コンビニ飯ばかりだったしなーって思ってた目玉焼きでも作ってみようと思って、前ひなのさんに教わった通りに蒸し焼きにしたんです。水入れて、蓋して。そこまではできたんですけど、蓋開けたら湯気が想像以上にブワッて出て、びっくりしちゃって……」

少し恥ずかしそうに私から目を逸らす綾人くんにつられて部屋の中に目をやると、ひっくり返ったフライパンと、潰れて黄身がべちゃりと広がった目玉焼きが床に落ちていた。そして、シリコン製のフライパンの蓋も。私が使ってるのと同じやつだ。

「目玉焼きとか餃子とか焼く時あるあるだよ。シリコンの蓋って水分でくっついて上手く取れなくなってる、開いた瞬間ブワッて蒸気が出たりするも

んね」

「そーなんですね。フライパンの蓋なんて使ったことなかったんで知らなかったです……」

「火傷は？　ちゃんと冷やした？」

「特に火傷はしてないです！　バイトで皿洗いはしてるんで、指の皮厚いんです」

ほら、と綾人くんが開いて見せてくれた手は、本人の言う通り赤くすらなっていないかった。安心するのと同時に、手のひらを両方ともこちらに見せてくれる仕草がなんだか子どもみたいで、可愛くて笑いが漏れてしまった。

「ふふ。そっか、よかった」

心配したとはいえ突然押しかけてしまったから、そろそろ帰ろうとした

時に、ふわりと自分の部屋から肉じゃがの香りがした。そうだ。

「綾人くん、肉じゃがが好き？」

「好きです！」

少し食い気味に綾人くんが答えてくれた。その目には期待がありありと輝いていて、私は「ちよつと待ってて」と声をかけて一旦自分の部屋に戻った。台所の収納から深めの保存容器を出して、残っていた肉じゃがをよそう。もう一度玄関から出てみたら、綾人くんは待ちきれないと言うように向こうの玄関から顔を覗かせていて可愛すぎた。

「はい。ちよつど作りすぎちゃったなって思ってたところだったの」

「わー！ ひなのさん家からめーっちゃいい匂いしてたんで、肉じゃが食いてーってなってたんです！ やったー！」

顔いっぱいニコニコ笑う綾人くん、思わず心臓がキュンとなる。あ

あ、なんだこのかわいい生き物は。お姉さんがお腹いっぱい食べさせてあげたくなっちゃうではないか。

ブンブンと大きく手を振る綾人くん小さく手を振り返して、私は部屋に戻った。そして食卓につき直す。肉じゃがは少し冷めてしまったけど、隣で綾人くんも同じものを食べるんだ、と思うと心は少しあつたかくなる。遅れて「うまー!」という綾人くんの声が壁越しに聞こえて、思わず笑ってしまった。

テレビを見ながら少しのんびりとした時間を過ごして、お風呂にも入る。寝る前に「アレ」をしておかないと。私はスキンケアを終えた後、ベッドの上に座って、下から潤滑ゼリーを取り出した。

元カレと別れてから私は週に二回、月曜日と水曜日にセルフプレジャー

…明けて透けに言えば、オナニーをしている。

というのも、元カレと別れた原因が、不感症だと言われたことだからだ。大学生の頃から付き合っていた彼氏は初めての恋人だった。それまではオナニーをしたこともなく、もちろんセックスも彼氏が初めてだった。初体験は痛くて途中までしか入らず、その後なんとか全部入るようになったけれど、いつも痛くてしんどかった。

それでも彼氏はセックスをしたがったし、私も彼氏のためにできることはしてあげたかったから、応えた。でもやっぱりセックスの気持ちよさはよくわからなかった。それを察していた彼氏が、ある日行いを終えた後に言い放ったのが「お前、不感症なんだよ」という言葉だった。

優しい人だったし、彼なりに思うところもあったんだと思う。それでも、その言葉は私にとってかなりショックだったし、別れることになってめち

やくちや泣いた。

でも、泣いてばかりもいられない。次の恋では「気持ちいいセックスができるいい女になる」ことを目標に、私は曜日を決めてセックスの練習をすることにしたのだ。

ネットで色々調べた結果、最終目標を中イキに設定して練習している。するりとパジャマのズボンとショーツを下ろしたら、潤滑ゼリーを指につけて、割れ目に沿って塗りたくる。

「ん……」

割れ目をすり、すり、と優しく撫でると、だんだんと緩い気持ちよさがやってくる。

中イキができるようになるためには、まずクリトリスでの外イキができるようになって、イク感覚を掴むのが大事だとネットに書いてあった。だ

から全体に潤滑ゼリーを塗ったら、ちよつとぷっくりしてきたクリトリスに優しく触れる。

「ん……♡」

クリトリスを優しくこねていると、だんだん甘く疼いてぷっくりと主張し始める。ぎゅ♡と押したり、強めにすりすりしたり。ふわふわと体が温かくなってくる。

「んう……♡」

最近、外イキはできるようになってきた。そのせいでうつかり声が出てしまうようになってきたのだ。だから私は大きめのクッションをギュッと抱いて、そこに顔を埋めて声を我慢する。なんせ、このアパートの壁は薄い。隣の綾人くんにもしも聞こえてしまったら、合わせる顔がない。

でも、「綾人くんに聞こえちゃったらどうしよう」と考えると、体があつ

と熱くなるようになった。

クリを押し潰す指の力がだんだん強くなる。ぎゅー♡っとしていると、そこから気持ちいいのが全身に広がっていく。

人懐っこくて、ニコニコ笑う綾人くん。でも、ちゃんと「男の人」なもの知ってる。さっき子どもっぽく手を見せてくれた時の、節のあるしっかりとして少し固そうな、男の人の指。

もし、それがここをこすってくれたら。

「んん♡」

ぎゅ、とお腹が切なくなる。クリトリスがすっかり腫れて、「もっともつと」とねだっているような。声が漏れないようにクッションに顔を埋めながら、いいじとクリトリスをこねる。

「っ♡、ふ、」

一瞬、息が止まる。背中を走るピリリ♡とした快感。

最近、一人でしているとどうしても綾人くんのが頭をよぎる。前までは気持ちやそういう方向に持っていくために、えっちな音声を聞いたりしていたけれど、最近は何もなくて大丈夫になってきた。その代わり、気づくと綾人くんのことを考えてしまっている。

中指をそっと入り口にあてがうと、ちゅぷ……♡と滑るように入っていく。もう潤滑ゼリーのぬめりだけじゃなく、ちゃんと濡れている。そのままザラザラしたGスポットまで指を伸ばし、こすこす♡と刺激する。

「ん♡、ん♡」

綾人くんが引越してきた時はまだ元カレと付き合っていた。だから、ただのかわいいお隣さんだった。たまにゴミ捨ての時に挨拶するくらいで、いつもニコニコしているから「かわいい子だなー」と思う程度だった。

でも、最近の綾人くんはなんだか距離が近い。毎朝一緒に駅まで歩くようになったりしたのもここ半年くらいのことだ。丁度彼氏と別れた頃。恋人に冷たい言葉で別れを告げられて、そこに可愛い男の子が距離を詰めてきたら、ちよつと傾くつていうか。なんか、いいなって。期待してしまつても仕方ないんじゃないかな。

でも、部屋で一人でしてることがバレるのはやばい。ましてや、「綾人くんのことを思い浮かべで一人でシてます」なんてバレるのは絶対にダメだ。「んんっ♡あっ♡」

G スポットをちゅり♡ちゅり♡するたびに、体にぎゅ♡と力が入つてしまう。ナカもヒクヒク♡♡♡していて、指を柔く締め付ける。

バレちゃダメなのに。体がぎゅ♡♡♡つてして、喉の奥から勝手に声が溢れてしまう。それを抑えるためにもっとクッションをギュッとして顔を埋

めると、少し息が苦しくなる。

カタン、と隣で物音がする。

綾人くんがいるんだ。この壁の向こうに。

ご飯食べ終わったかな。もう寝るところかな。思い浮かべると、ナカがキ
ュウウ……♡と指を締め付ける。

バレちゃダメ。でも、そう思うほどに気持ちよくなってしまう。

最近、この背徳感にハマりつつあった。

キツくなってるナカで、Gスポットをとん♡とん♡と指で叩くように押
す。その度に淡いピリピリが下半身に広がって、息が浅くなる。だめ♡♡ほ
んとはだめなのに♡♡

「は♡、ん♡♡、ん♡♡♡♡」

ピリピリした刺激はあるのに、もっと大きいのが欲しくなる。中イキす

る練習をしてるのに、クリトリスの方がせつない。クリトリスをいじった
らもっと気持ちよくなれるのに。ふわふわした頭は勝手に指を中から引き
抜いて、人差し指と中指の両方でクリトリスをくちゅ♡くちゅくちゅ
♡♡と弄りはじめてしまう。

「ん♡♡ん♡♡ん♡♡♡♡」

頭がふわふわして、もっともっと指が速まる。くちゅくちゅくちゅ♡
くちゅくちゅ♡♡くちゅくちゅくちゅ♡♡♡♡

「ん♡♡♡ん♡♡♡♡♡♡」

ぷくぷくに腫れたクリトリスがぷちゅ♡と押し潰されて、くちゅくちゅ
やくちゅ♡♡と水音を立てている。あ♡くる♡♡きちゅ♡♡♡声だしちゅ
やだめ♡♡♡でも、のど♡ふるえちゅ♡♡♡

「ん♡♡♡ん♡…♡♡♡♡」

ビリビリビリ♡♡と背中が震えて、つま先がギュウ♡♡と丸まる。全身がきゅううつ♡♡♡と収縮して、甘い痺れが全身に伝わった。

ふわ、と力が抜けると、私はそのままぽすりとベッドに倒れ込んだ。

あー、今日も外イキしちゃった……。

外イキを覚えられたのはいいものの、セックスのためにはちゃんとナカが気持ちよくならなきゃだめなのに、いつも結局外イキで終わってしまう。だって気持ちいいんだもん。クリトリス。まだ少し熱を持っているそこがちよっとだけ疼く。

カタカタ、とまた隣から物音がして、びくりと肩が跳ねた。振り返って、壁をまじまじと見つめてしまう。

私のベッドは綾人くんの部屋側の壁にある。テレビがお隣さん側にあるとうるさいかもしれないと思って逆側に置いたら、自然とベッドがそっち

になつてしまつたのだ。

今となつてはちよつと失敗したかもしれないと思う。テレビの音が多少しても綾人くんならそんなに怒らないだろうし、オナニーの時にこんなに声が出そうになつてしまうのは完全に予想外だつたのだ。

家具を動かそうにも一人じゃ結構大変だし、正直今のこの配置が結構気に入っているし、すっかり慣れてしまつたからちよつと腰が重い。それに声が漏れたりしないようにちゃんとクッション抱いてるし。声も、我慢してるし。一応。

とりあえず今日の練習はこれでおしまい。なんだかんだ、外イキとはいへちゃんとイけるようになったのは大きな成長だ。彼氏と別れてからコツコツ練習した甲斐もあるというもの。あとは、ちゃんと中だけでイけるようになるといいんだけどな。やっぱり、そろそろオモチャとかの導入も考

えた方がいいかな。でもモーターの音とかがうるさいってレビューもあるし、そもそもそういう大人のオモチャを家に置くの、なんだか恥ずかしいし……。

うーんと頭を悩ませてみたものの、いった後のふわふわした気持ちよさと一緒に眠気が来てしまったので、枕元のティッシュで簡単に後始末をして、布団に入った。

えっちシーンサンプル 1

何も言えずにいる間に、綾人くんは私の膝を割って自分の膝を差し入れ、私の股をグッと押した。

「ああんっ♡」

「悪い子のひなのさんにお仕置き。俺のことめちやくちやにしたんだから、ひなのさんもめちやくちやにならなきゃだめだね」

ぐ♡ぐ♡と股を押されるたびに、面で刺激されるソコに快感が走る。「あ♡あっ♡」と無意識に声が出てしまう。知らない、こんなの、一人じゃできないから。

「おまんこ気持ちいいね♡ひなのさん、彼氏と別れてからどんどんえっちになってる。自覚ある？」

「そん、あ♡あ♡やめ♡♡あんっ♡」

「やめてほしいの？　ほんとかなあ。もうこんなにぐちやぐちなのに」

綾人くんの膝がぐりぐりっ♡♡とソコを押し潰すと、くちゅくちゅっ♡と水音がくぐもって聞こえた。

「好きな人がいるのに、俺にこんなにされちゃって。ひなのさんって淫乱なの？」

「ちが、ちがくてっ、あっ♡」

「だいじょーぶ。ひなのさんがどんなに淫乱でも、俺、ひなのさんのこと好きだよ」

好き。その言葉にお腹の奥がキュンと苦しくなる。

綾人くんが私のこと好き？　でも、綾人くんには私が一人でしてたのバレてて、淫乱って言われて、でも？

刺激と思考が絡まってしまっている間に、綾人くんは私のブラウスのボタンを外しきってしまった。仕事帰りのままの、インナーとブラ。綾人くんは私のインナーをたくしあげて、ハーフカップのブラをずらして乳首をきゅ♡と両方同時に強くつまんだ。

「ああんっ♡♡」

「ひなのさん、あんまり乳首いじってないでしょ。喘ぎ始めたらすぐにクチクチ♡可愛い音出してイっちゃうもんね。下ばかりいじってるの、俺知ってるよ。ちゃんと乳首も可愛がってあげないと」

綾人くんの爪先がかりかり♡と乳首の先を引っ搔く。その度に甘さをはらんだ痛みが体に鋭く走る。

「うんっ♡あんっ♡っん♡♡」

「乳首カリカリ気持ちいいんだ。やっぱりひなのさん、めっちゃえっちじ

やん♡」

綾人くんの言葉に理性が溶けそうになってしまふ。だめ、こんなのだめ。でも。綾人くんの声も、指先も、甘い痺ればかり私に起こす。

かりかり♡♡♡かりかり♡♡

ひっかきの刺激で痺れてきた乳首を、ぎゅう♡♡♡と突然押し潰される。

「あああん♡♡♡」

「こーら。気持ちよくてもそんなに声出したらみんなに聞こえちゃうよ？」

「だって♡あ♡♡ちくび♡♡ぎゅ♡♡♡」

ぐりぐりと指で強く乳首をつねられて、乳首だけじゃなくアソコまで痺れるような感覚が走る。ぐりぐり♡ぐりぐり♡と手を止めてくれない綾人くんのせいで、甘えるような声が出てしまう。

えっちシーンサンプル 2

綾人くんはショーツを脱がせてからそのクロッチを見せつけてくる。

「下触ってないのに、こんなに濡れてるの。わかります？」

「わかった！ わかったからそれもうポイってして……！」

「えー」

クスクスと笑う綾人くんは、張り詰めていたものが少しだけ緩んだ気がした。綾人くんはショーツもベッドの下に落としたかと思うと、私のおへそにキスをした。そのもう少し下、子宮が勝手にキュン♡とするのを感じるのと同時に綾人くんはれろお♡とクリトリスを舐め上げた。

「あああんっ♡♡」

ゾクゾクゾク♡と背筋に電流が走るみたいだった。不意打ちの強い快

感に思わず声が溢れてしまう。

と同時に、ゴソゴソという物音が聞こえた。私の部屋と反対側、山田さんの部屋の方からだ。

慌てて両手で口を塞ぐと、ふふ、と綾人くんは笑った。

「いい子」

笑い事じゃない……！　と思う私をよそに、綾人くんはまたクリトリスをなぶり始めた。

「んんっ♡んんっ♡♡」

「じゅるっ♡んちゅ♡はあ、ひなのさんクリで外イキするの大好きなんだもんね♡今日はクリもいっぱい吸ってあげます♡」

ぢゅっ♡ぢゅるるっ♡♡れろ♡れろれろ♡♡ちゅ♡ぢゅっ♡♡♡♡

「んんんうつつ♡♡♡んんんうつつ♡♡♡」

十分すぎるくらいに熱を持ったクリトリスが吸われて、舐め上げられて、舌先で押し潰されるたびに、腰がビリビリ♡♡と鈍く重く痺れる。ビクビク♡と震える腰がヘコヘコしようとするとの綾人くんに捕まえられて、代わりに爪先をぎゅう♡と丸めて太ももをビクンビクン♡♡と震わせてしまふ。

「あうん♡♡くりらめ♡♡しゅったあ♡♡♡あんんう♡♡♡」

口周りの筋肉が弛緩して呂律が溶けてしまふ。綾人くんはそれでもクリトリスから口を離さない。なんで♡♡こんなをお願いしてるのに♡♡♡「んんう♡♡♡んう♡♡♡」

漏れ出る声を両手で一生懸命抑える。だめ♡♡隣に聞こえちゃう♡♡こんなえっちな声聞かれたら恥ずかしくて死んじゃう♡♡♡

じゅっ♡♡ちゅるるっ♡ぢゅ♡ぢゅっ♡♡かり♡♡♡

「ぐんううううっ♡♡♡♡」

柔くクリトリスに歯を立てられて、腰がビクビクッ♡♡♡と跳ねてパァン♡♡♡と快感が白く弾けた。ビリビリとした痺れが全身に行き渡って、ヒクヒクが止まらない……♡♡